生命尊重推進の会

NPO法人
天使のほほえみ
会　報

発行所　ＮＰＯ法人　天使のほほえみ
理事長　鎌田ヒサ子
会議室　東京都中央区銀座 8-12-5
〒104-0061 全国燃料会館９階
年会費　個人　一口　千円以上
法人　一口五千円以上
郵便振替口座　00100-6-316987
特定非営利活動法人　天使のほほえみ

初夏号――No.4
発行日　平成19年４月25日

ホームページ：http://angelsmile.yu-yake.com/　ブログ：http://angelsmile06.blog.shinobi.jp/

◎胎児と子供は国の宝です！　◎大事に生んで育てましょう！

《インタビュー》

育児は孫まで
―いまこそ、伝統的日本の子育てを（上）

田下昌明

たしも　まさあき
小児科医。北海道旭川市、医療法人歓生会豊岡中央病院理事長、院長。昭和12年（1937年）生まれ。北海道大学医学部卒。医学博士。著書に『よい子はこうして育つ』『母の積木』『田下昌明の子育て教室』『「子育て」が危ない』『真っ当な日本人の育て方』などがある。

いま日本の伝統に根ざした日本式育児法に自信をもたせてくれる本『真っ当な日本人の育て方』が注目を集めています。この本の著者である小児科医の田下昌明先生にお話をうかがいました。いつからか若いお母さんは、育児書を読んで子どもを育てるようになりました。アメリカから入ってきた『スポック博士の育児書』は社会に大きな影響を与えたと思われます。しかし、それはどういうものだったのでしょうか。子育ては日本の未来につながっています。伝統文化にもとづく育児について考えてみましょう。

●サトルはうちの旦那、オサム君はうちの子

私が小児科医になったのは昭和四十年でした。そのころから、私は誰を診ているのか、という気持ちになることがありました。診察室の子供も母親も日本人らしくないのです。

私が診察室でよく目にするのは「脱いでちょうだい」と子どもに懇願する母親。よく耳にすることば、「いけません、先生に叱られますよ」。いうまでもなく間違いです。

「オサム君ここにいてね。サトル、バッグ持ってきて」と言っている。サトルちゃんという子が私の診察を受けるのかなと思っていたら、「サトルはうちの旦那でこの子はオサム君です」というのです。どうなっているのでしょう。夫を呼び捨てにして、わが子を君づけにしている。

こんな光景にでくわしました。ファミリーレストラ

呱呱の声

今年も桜は雨や風にもじっと耐え、日光に照らされて周りの雰囲気を明るくしてくれた▼生物は花も動物も、虫や魚にいたるまで、自己の種族の維持にその一生の大半を捧げている。人も例外ではない▼この大河ドラマのようないのちの消長を見ていると、この流れに逆らえないということが実感として浮かんでくる▼赤ちゃんは、ちゃんと生まれて当たり前、子沢山も当たり前、その通り当たり前に考えれば、少子化などは起こりようもなかった▼これから地球は環境汚染という新たな脅威にさらされる。それにも負けないだけの多くの同胞を確保するためにも、母胎に宿った全ての命を救わねばならないと痛感するこのごろである。

ンで家族が食事をしていました。両親と小学生の兄弟です。レストランで食事をしながら、一言も話しをしない。子供たちはマンガを読んでいる。マンガを見ながら食べている。

日本はどうなってしまったのか。

母親が、自信をもって何かを言ったりしたりできなくなってきている。このような問題は、戦後の育児があやふやになって、それまでの日本式育児法のいいところが消えてしまったせいだと私は思っています。このような状態から早く抜け出すべきです。

●おじいちゃん おばあちゃんにもう一度

もともと農耕を中心に生活していた東アジアでは、三世代四世代同居の大家族でした。目の前ですべての生活の知恵が伝えられていたのです。育児は代々受け継がれるものでした。

核家族化したことによって、三世代が同居しているケースは多くないでしょう。しかし、スープのさめない距離に住む祖父母や、共働き夫婦のせいで孫の世話をしている祖父母もいます。そうしたおじいちゃんおばあちゃんには、もう一度、育児の現場にもどってもらいたい。

古くからある日本式育児法は、〈夫婦は仲睦まじくしなさい〉〈赤ちゃんに添い寝をしなさい〉〈連れて出るときはオンブをしなさい〉〈お父さんお母さんを大切にしなさい〉〈兄弟姉妹は仲良く助け合いなさい〉〈世の中の役に立つ人になりなさい〉などです。数十年前までは、わざわざ文字になどしなくてもよかった。

育児、教育とは、その民族、その国家の過去と未来をつなぐ重要な仕事です。

育児は「孫まで」だと思います。「わが子を育てあげればそれでおしまい」というものではありません。おじいちゃんおばあちゃんにも、もう一度育児の場にもどってもらわなくてはなりません。自分が子に教えたことが、ちゃんと孫に伝えられているかどうか確認するところまでが、おじいちゃんおばあちゃんの責任範囲なのです。

●抱き癖はいけないのか？

なぜこのような状態になったのか。

「抱き癖をつけてはいけない」、私は、このことばが育児に混乱をもたらしたと思っています。「どうして抱き癖をつけてはいけないのですか？」と、私が母親に尋ねたら、「そんなこと当たり前でしょう」と言われるでしょう。「どうしてそんなことを聞くのですか」と言われますね。では、誰が最初に「抱き癖をつけてはいけない」と言ったのでしょうか。

昭和二十年（一九四五年）日本は敗戦を経験して茫然自失の状態になりました。日本は外国に占領されたことのない、いわば無菌民族でした。当時の日本人は何を頼りに生きていけばいいかわからなくなってしまっていた。そこへ極東国際軍事裁判の判決が出た。

なにからなにまで日本が悪いのだ、と。

私たちの先輩は、ノックダウンしてしまいました。そして一億総懺悔をしてしまいました。戦争当時の軍や制度を否定しただけでなく、大切な自国の歴史や文化まで否定してしまった。これは当然、育児のなかにも入り込んできました。

敗戦によって、親の世代との断絶ができてしまった。

欧米の生活習慣をなんでもかんでも真似しようという状況を、わざわざ作り出してしまったのです。それ

「胎児の命 守りたい」新聞に大きく報道!! 嬉しい気運の高まり

産経新聞（4/26）に特別５段組・約1700字（19cm×25cm）。胎児の命の尊重を目指し、無料の「妊娠かっとう相談」や一円募金などの運動を続けるNPO法人「円ブリオ基金センター」の全国集会とシンポジウムを写真入りで紹介。尚、人工妊娠中絶実施数（平成17年厚労省統計）が20歳未満から49歳までの５歳ごとの件数と女性千人あたり人数で掲載された。全国紙の記事として画期的なこと。昨秋の朝日新聞「人口増の一因に中絶の減少」などと共に妊娠出産をめぐる認識の高まりの証拠である。

まで私たちが持っていた精神的なものから物質的なものまで、欧米に比べて、劣等であり、不合理であり、不便だと思ってしまったのです。

例えば――赤ちゃんは人工栄養で育てた方が発育が早い。外国人女性のオッパイの形がいいのは、人工栄養で育てるから。日本人の脚がガニ股なのはオンブするから。日本人の赤ちゃんは、親に添い寝をしてもらっているから独立心が育たない。子供には反抗期が来るから、やさしく見守ってやればいい。などなど、みんな妥当とはいえません。

日本人が自分たちの過去のすべてを否定したとき、その瞬間に日本から育児と教育の指標が消えたのです。だから、戦後の育児や教育が混乱したのは当然すぎるほど当然なのです。

●子供は誰のものか？

終戦の翌年、アメリカの教育視察団がやってきました。ほとんどが教育学者のジョン・デューイの思想を受け継ぐ人たちです。デューイの思想は、子供は能動的存在で、誘い出したり、引き出したり、発展させたりする必要はない、教育者は子どもの活動を確かめ、活動に適切な機会さえ与えればよい、というものです。だとすれば、こんなに楽な育児はありません。

デューイの理論を実際の育児にあてはめた『スポック博士の育児書』が出版され、日本語訳もでました。家族の秩序崩壊が始まっていた日本に大きな影響を与えました。「家付き、カー付き、ババア抜き」ということばが流行していました。

『スポック博士の育児書』を読むと、はっきりと生後六カ月から母親から離せと書いてある。母子の密接な関係は不要、といわれている気がしてくる。抱き癖をつけてはいけないといわれている印象があります。

そして、いまだに間違った指導が一人歩きしている。

子供が親に求めているのは、権利とか独立とか自由ではなくて、強い保護です。この強い保護からの、そこからの独立、そこからの自由ということになっていく。そこを履き違えているから、おかしな若者が出てくる。

書店でたくさん売られている育児書には「こうしなさい」とは書いているけれど、そうする意味は書いてありません。育児方法はあるけれど、育児論はない。立派な日本人にするには、という暗黙の共通の目的を失ってしまったために、どんな題目についてもハウ・ツー方式で書かれているのです。

育児方針は「一、子供は誰のものか。」「二、何のために子供を育てるのか」「三、どんな大人になってほしいのか」という三つの問いから決まってきます。

この問いについて考えてみてください。

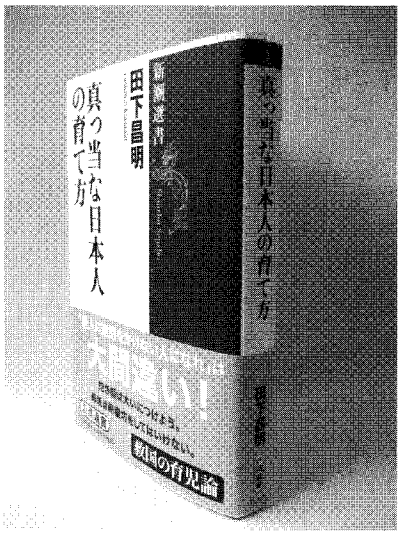
（次号につづく）

主張

妊娠・出産の神秘

「できちゃった」「……失敗した」など、軽率な言葉が横行している。〝子供は大自然から授かった奇跡の命〟とは、村上和雄筑波大学名誉教授の言だが、一個の受精卵が母親の子宮内で38週で60兆の細胞となり、人類普遍の肉体と双生児でも異なる個性を兼ね備えたヒトに成長するプロセスは、人智を超えている。

昨年末、アメリカで21週・284グラムで超早産した女児が4カ月で2040グラムに成長、退院した。偉大な生命力、その本源〈サムシング・グレイト〉に敬服する。中絶など論外・殺人である。

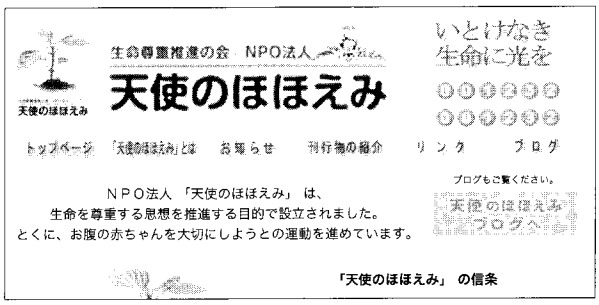


『真っ当な日本人の育て方』
田下昌明著
新潮選書　1200円（税別）
小児科医がたどりついた日本人にふさわしい救国の育児論。

ホームページもがんばっています!!

天使のほほえみでは、ホームページとブログを開設しています。ぜひ一度お訪ねください！

みなさまのコメントをお待ちしています。
ホームページ　http://angelsmile.yu-yake.com/　　ブログ　http://angelsmile06.blog.shinobi.jp/



NPO法人「天使のほほえみ」の、生命尊重の主張を伝えるホームページ。

●265グラムの生命

新聞に、265グラムの超未熟児が無事に育って3000グラム以上になって退院したというニュースが出ていました。ほっと心を和ませるニュースですね。

出産を卒業に例えれば、学徒動員などで、かなりはしょって、学業半ばで卒業したようなものです。

このように、出産＝卒業はおめでたいことです。しかし、卒業できなかった幼い生命は、脚光を浴びることもなく、無言で去っていきます。

先日、拉致問題の講演会がありました。その中で聞いた話ですが、日本の各地で不自然な失踪が相次いだ頃、警察の関係者が集まり、協議をしたそうです。

色々と分析してみると、どうも北朝鮮による拉致の疑いが濃厚であるということになりました。

つまり、あってはならないことが起きたという訳です。問題はその後です。「あってはならないことが起きた、それに対して、どのように対応するか……　あってはならないことは、起きなかったことにしておこう（！）」ということで、何の対策もとられなかったのです。

その結果、その後も、拉致は続いて起こりました。

妊娠中絶ということも、なんとなく社会の日陰にしておいて、中絶しても、なにも無かったような顔をして、母親になることを中途で放棄した女の人が、毎日を暮らしています。

しかし、拉致問題が、とうとう爆発して大きな社会問題、いや、国際問題に発展したのと同様、中絶問題も無視できない大きさになっていくでしょう。

いじめによる子供の自殺が後を絶たないのも、決して無関係ではないと思うのです。「健全な精神は、健全な身体に宿る」という言い尽くされた言葉でも、本当に健全な精神ならば、社会の日陰にも日光を当てるような健全さが求められます。

タブーとは、人間の心の弱さの現れです。私たちの心が本当に強く明るくなれば、周りも自然に明るくなっていくでしょう。

（二〇〇七年四月四日㈬）

ブックレット第二弾

◀『日本人がいなくなる
～過去の遺産から
未来に向けて～』

A5判128頁・三好誠著
日本の将来を考え、母体保護法改正の必要性が分かりやすく書かれています。
頒価（送料含む）1部400円。10部以上350円。50部以上300円。

▶『いとけなき生命に光を
～あなたも初めは
胎児だった～』

A5判80頁・三好誠著
生命の大切さを86項目にわけ、具体的で説得力溢れる文章で書かれています。
頒価（送料含む）1部300円。10部以上250円。50部以上200円。

ブックレット『いとけなき生命に光を』が光の輪を広げています！

心理カウンセラーの吉田廸惠先生もそのおひとり。

提言

再び、母体保護法（優生保護法）改正を訴える!!

所長　吉田廸惠（ゆうけい）

最近、次々とおぞましい家族間の問題が報道されています。家族を殺して遺体を切り刻むという背筋が凍るような事件に、私は思う事があります。

それは、戦後当たり前のように行われてきた、数多くの堕胎という行為です。家族となるはずだった胎児を、お腹の中で切り刻み、流し去ってきたその行為を、今そっくりそのまま見せられているのではと、私には思えるのですが。

もっともらしい理由のもとに制定された優生保護法も、アメリカによる日本弱体化政策の一環ではなかったのでしょうか。NPO法人「天使のほほえみ」発行の『いとけなき生命に光を』に、次のように記されていました。「優生保護法が制定されたのは昭和二十三年、この法律は生活保護法の一年前、医師法や医療法より先に制定しているのです……そこには占領軍の強い意思が働いていたことは容易に理解できるでしょう。占領軍は強い日本が再建されることを恐れて、多産の日本人の人口―子供を減らすことを企みました。生活苦を言い立てれば口実はできたのです。耐乏生活を捨てさせ、真面目で勤勉な日本人に諸外国並みの快楽におぼれさせようとしたのです」

その結果、日本中のブルジョア層までもが「経済的理由」を使って、堕胎を繰り返してきました。その報いを今こうして受けていると考えれば、この一連のおぞましい事件も納得がいきます。

これらの問題に対して、識者の方々がいろいろとコメントしています。それらのどれもが、原因の一部分を言い当てていると思います。戦後の教育内容が間違っていたことの結果を、今見せられていること以外の何物でもないでしょう。

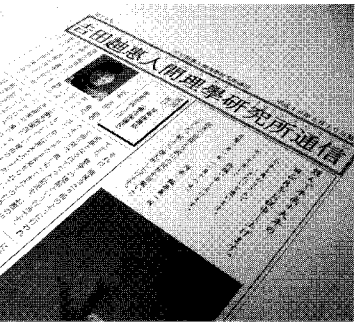
しかし、人の心がここまで破壊されてしまうという事は、単に心の教育、道徳問題のみでは説明がつきません。多くの日本人が、法のもとに我が子殺しをし続けてきたまさに報いです。胎児も立派な生命です。初めから立派な人間なのです。

今この国では、フェミニストやサヨクの女達が、「産まない権利」などとうそぶいています。何かというと「生命尊重」を掲げるくせに、胎児は生命ではないというのですから白々しい限りです。

現代の人々は、いくら知識人ぶってみても、目に見えない世界の存在の恐ろしさを知りません。霊界や魔界のことを知らない人には、魔がさした者の挙動は理解しがたいことでしょう。しかし、そこから来る影響の恐ろしさ、この点の理解ができなければ、一連のおぞましい事件をどんなに論じてみても、根本解決には程遠いことでしょう。

とにかく一刻も早く、母体保護法（優生保護法）を改正、または廃止すべきです。でなければ、これからもますます日本人の心は壊れていくばかりでしょう。

※吉田廸惠人間理學研究所通信第20号（平成19年2月10日発行）より転載。



ご意見募集!!

誌上討論

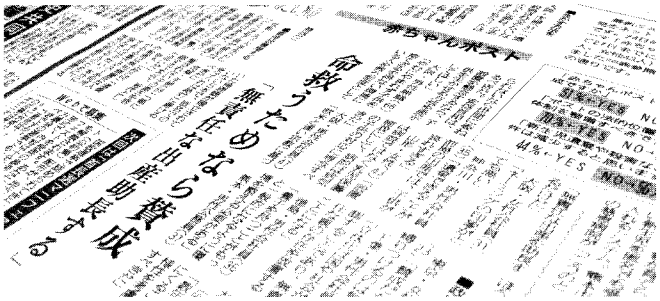
テーマ「赤ちゃんポスト」の設置　是か否か

（ご意見を募集します！）

※ドイツのキリスト系社団法人で6年前から設置されている「新生児保育器」の預け入れ窓口。昨年11月、日本で初めて設置申請が発表され、賛否の関心が高まっています。

※熊本市の慈恵病院（注1）で市保健所に申請、市が国に回答を求め、本年2月、厚労省が「違法とは言い切れない」と口頭で見解を示す。（文書は――「お墨付き」の独り歩きを懸念して応ぜず）

注1　キリスト教神父の開設（明治31年）になる診療所を母体とする医療法人「聖粒会」設立（昭和53年）の総合病院（98ベッド）。中絶手術は行っていない。



※産経新聞（平成19年３月３日）より転載。

「ポスト」のねらい　親が養育できない新生児を受け入れ、中絶・置き去りなどで子供の命が失われること・母親の遺棄罪を防ぎ、中絶でダメージを受ける母親を救う。

一番の目的は「赤ちゃんを預けてもらうことでなく、相談してもらうこと」と理事長。

「赤ちゃんポスト＊」とは　申請〈企画〉名は「こうのとりのゆりかご」。

＊赤ちゃんは物でなく「ポスト」の呼び名には反対が多い。

色んな事情〔経済上・母親の健康・未婚・不倫・年齢上・不慮の災難…〕で養育できない新生児の保育器。

受け入れ体制

病棟の外壁に45×65センチの扉をつけ、内部を36度に保った箱を置き、センサーで赤ちゃんを感知。医師・看護師が体調チェック。警察に届け、行政と協議しながら、乳児院に預ける。里親の活用など検討する。思い直した親の引き取りを想定し、対応の看板・文書もある。

◆胎児中絶を減らし、いのちを大切にする生命尊重の真意確立・気運盛り上げの好機です。より広く多面的に運動展開するために、それぞれの想いを述べていただきたいと考えています。

締め切り六月十五日。当会事務所まで。字数自由。匿名可。会報5号に掲載。

慶祝…エール

当法人の田中道治理事が茨城県牛久市議に上位初当選。「胎児も子供も社会の宝です。大事に生んで優しく逞しく育てましょう」…など強調した由。地方議会での生命尊重運動の展開に期待!!

問．赤ちゃんポストの設置に賛成ですか？―はい 51%　いいえ 49%

問．ポストの法的位置づけなど体制を整備すべきですか？
――――はい 70%　いいえ 30%

問．新生児遺棄や殺害などの事件は減少すると思いますか？
――――はい 44%　いいえ 56%

※産経新聞（平成19年３月３日）より転載。168人（男性125人、女性43人）からの回答結果。